

DGD自主ゼミ 2003/05/29 担当：真鍋 寛
ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ、『千のプラト』（宇野邦一・小沢秋広・田中敏彦・
豊崎光一・宮林寛・守中高明訳、河出書房新社、1994）

1923年11月20日 言語学の公準 | 106 - 112 頁

どんな「外的」要素にも存在しない言語抽象機械が存在するであろう

(p . 106 ~ 107)

表現と内容の二つの独立性

(「道徳の地質学」で述べられたように) 内容と表現は独立しており異質である。ストア派によって見出されたこの独立性は「身体の行動および受動」と「非身体的行為」(言表による「非表現」)であり、内容の形式が身体の組み合わせによって成立するように、表現の形式は、非表現の連鎖によって成立する。

葡萄酒の滴が水の中に注がれるときには、身体の混合が起こる。とともに「水が赤くなる」という非身体的変形(事件)が起こる。

こうしてストア派によって見出されたパラドクスは次の点を考慮に入れなければならない。つまりそれらは、非身体的行為であり、言表の被表現であるが、身体そのものに帰属する。

介入、日付

(非身体的行為は)身体的でない属性を表現しながら、また同時にこれを身体に帰属させながら、人は表象するのでもなく、指示するのでもなく、いわば介入するのであり、これはまさに言語の行為なのだ。

それゆえ内容と表現は二つの独立した形式であり、表現は内容の中に挿入され、介入する(そこにストア派における日付の意味がある。1917年7月4日夜、1923年11月20日)。

言表行為のアレンジメント、指令語

表現が内容に挿入され、一つの特徴から、他の特徴へと人が絶え間なく跳躍し、記号が物自体に働きかけると同時に、物が記号を通じて拡張し、展開していく仕方を確立するのだ。一つの言表行為のアレンジメントは、物に「ついて」話すのではなく、物の状態または、内容の状態にじかに話すのだ。それゆえに、一つの同じx、同じ粒子は、それがとる形態にしたがって、作用し、作用される身体として、あるいはまた行為し、指令語となる記号として機能するだろう。

(p . 108)

内容と表現

内容の形式は表現のそれと同様に、表現の形式も内容のそれと同様に、それらの形式を巻き込む脱領土化の運動と切り離すことが出来ない。各々の形式を量子化し、それに従って内容と表現が結合し、交代し、互いに加速し合い、あるいは逆に、再領土化して停止するような脱領土化のさまざまな度合が存在する。

われわれが状況または変数と呼ぶもの、それはまさに度合である。身体の混合または集合体における比率である内容の変数があり、また言表行為の内的要素である表現の変数がある。互いに介入し合い、たがいに機能しあって通じ合うのは、それらの相対的な脱領土化の量子の結合によるのである。

(p . 109)

アレンジメントとは

一つのアレンジメントは二つの切片を含む。内容の切片と表現の切片である。身体の行動、受動の機械状アレンジメントであり、互いに作用しあう身体の混合である。言表行為の、つまり行為と言表の集団的アレンジメントであり、身体に向けられる非身体的変形である。

アレンジメントは一方では、これを静止させる領土的または再領土化された側面をもち、他方ではそれを上回る脱領土化の先端をもっている。

アレンジメントの四価性

(カフカの例) 鎖列の2形態。船 サークス ホテル 城 法廷、並びにそれらの部品・歯車による機械状に混合し、接続された諸身体。そして死刑宣告 判決 訴訟といった言表がある。互いに異なる形式、鎖列であるが、二つの形式が領土・再領土と脱領土のいずれかの状態によって互いに介入し合う(四価性)。K、機能 K はあらゆるアレンジメントを巻き込む一方、またあらゆる再領土化と冗長性、子供や、村や、愛や、官僚制・・・の冗長性を通過する逃走線または脱領土化を示している。

(p .110)

誤りその一. アレンジメントと弁証法は無関係

因果的作用によって、内容が表現を限定すると考えるなら、それは誤りで、このように言表を一次的な経済的内容に依存させる言表のイデオロギー的概念は、弁証法に固有のあらゆる困難に躓く。表現と内容の異なる二つの形式自体は、あらゆる闘争や葛藤を免れ、その関係は全く限定されないままに留まっているので、それを定めるために、イデオロギーの理論を再検討し、表現と言表を、意味や価値記号の生産形態として、あらかじめ生産の中に介入させなければならない。しかし、内容と表現の関係が弁証法的奇跡に依存する限り、あいまいなままである。

アレンジメントから存立平面へ

道具や財は諸身体の機械状アレンジメントが優位であり、言語や単語に対しては、言表行為の集団的アレンジメントが優位にあるが、アレンジメントの二つの側面の分節は、それらの形式を量子化する脱領土化によって実現される。そのため、一つの社会的地平は、その葛藤や矛盾によってよりも、それを横断する逃走線によって定義される。一つのアレンジメントは、下部構造も上部構造もない。あらゆる次元を唯一の存立平面に平たく伸ばしてしまうし、そこでは相互的前提と、相互的な挿入が機能する。

(p .111 ~ 112)

誤りその二.

もう一つの誤りは言語の体系としての表現形式の自足性を信じ込んでしまうことだろう。この体系は、意味作用をもつ音韻論的構造として、あるいは深層の構文的構造として理解されうるものである。こうした目論見は言語の抽象機械を打ちたてようとするものだが、(D / G にとっては) 十分に抽象的とは言えず、以前「線的」なままである。真の抽象機械は、一つのアレンジメントの全体に関するものであり、それはこのアレンジメントの図表「ダイアグラム」として定義される。それは言語的なものではなく、図表的なものであり、超線形的である。内容と表現はシニフィエ、シニフィアンではなくアレンジメントの変数である。

リゾーム・モデル

間接話法との関連で、プラグマティックな価値、あるいは内的変数を考えると、たちまち「ハイパー・フレーズ」を導入させ、「抽象的对象」(非身体的変形)を構築する。これらは超線形成を、リゾーム・モデルをとまなう。この観点からして、社会的視野や政治的問題と言語との相互浸透は、抽象機械の深層にある(表層ではない)。抽象機械には二つの状態があり、内容と表現が存立平面上に相互前提のもとに配置される状態と、もう一つは形式の二重性を超えて形式を識別不可能にしてしまう状態。最初の状態が相対的な脱領土化の運動であるならば、後者は脱領土化の絶対的な闘に達している。